パネルディスカッション

テーマ「持続可能な社会を目指して、理念から行動へ、今変わる時」
～今を、明日を、語る・描く・奏でる～

コーディネーター
川井　秀一
（かわい　しゅういち）
京都大学 教授
認定 NPO 法人才の木
理事長

（社）日本木材学会会長、（社）日本材料学会副会長等を歴任し、現在も日本学術会議会員、国際木材科学アカデミーフェローや政府・地方自治体の審議会等委員として国内外で活躍している。専門分野は木質材料学。平成24年度日本農学賞及び第49回読売農学賞を受賞。（社）日本木材学会主催の「日本の森を育てる木づかい円卓会議」議長を経て、2006年にNPO法人才の木を設立、理事長に就任。現在、木材利用と森づくりを通した環境教育の普及・啓発事業と調査活動を行っている。

パネリスト
稲村　哲也
（いなむら　てつや）
愛知県立大学 教授
同多文化共生研究所
所長

文化人類学が専門で、ペルー、ネパール、ブータン、モンゴル、中国などで牧畜社会を中心に100回に及ぶ現地調査を重ねている。2010年COP10開催にあわせ世界SATO（里）フェスタ「先住民族サミットinあいち」の組織運営を主導し、先住民族などの先人の文化から学ぶことの重要性を提言。中国四国大地震の復興支援にも携わる。愛・地球博記念公園・公園マネジメント会議会長、2013年4月より放送大学教授。

パネリスト
原田　さとみ
（はらだ　さとみ）
タレント
エシカル・ペネロープ
株式会社 代表取締役
JICA 中部なごや地球ひろば
オフィシャル・サポーター

1987年にモデルデビュー後、東海圏を中心にタレントとして活動。パリ留学を経て、1999年洋服のセレクトショップを栄にて経営。2000年出産。2010年フェアトレード・エシカル商品の輸入・販売・推進のためのエシカル・ペネロープ（株）を設立。2011年名古屋テレビ塔1階にフェアトレード＆エシカル・ファッションのセレクトショップ「エシカル・ペネロープTV TOWER」オープン。環境にも人にも社会にも配慮した持続可能なエシカル・ファッションの普及活動を中心に、フェアトレード推進にも取り組む。エシカル＆フェアトレードを紹介するファッションショーを企画・運営。国際協力機構JICA中部なごや地球ひろばオフィシャル・サポーターとして、毎年途上国へ視察渡航し、エシカル＆フェアトレードの品々で途上国をつなげる事業を展開中。

パネリスト
笹谷　秀光
（ささや　ひでみつ）
株式会社伊藤園 取締役
CSR 推進部長

東京大学法学部卒業。1977年農林省入省。外務省（在米国日本大使館一等書記官）や環境省（環境省大臣官房審議官等）に出向経験。2006年農林水産省大臣官房審議官、2007年関東森林管理局長を経て、2008年退官。同年伊藤園入社。本年5月より現職でCSR・環境を担当。ISO26000を活用した伊藤園グループのCSR活動の推進に取り組んでいる。

パネリスト
吉田　大
（よしだ　だい）
おむすび通貨 事務局長

釣りやキャンプの趣味が高じて足助に移住。自然のなりゆきで、個人主義消費生活から山村コミュニティの生産的生活へシフト。勤務先で労働争議を経験した後、組合経営的な特許業務法人を創立。資本主義市場経済の不条理を是正する手段として、流域圏内で流通する米本位制コミュニティ通貨を着想し、2010年からおむすび通貨を発行する事務局「物々交換局」を運営している。

コメンテーター
**マリ
クリスティーヌ**
（Mari Christine）
あいち海上の森センター
名誉センター長

父親の仕事に伴い4歳まで日本で暮らし、その後ドイツ、アメリカ、イラン、タイ等諸外国で生活。単身帰国後、上智大学国際学部比較文化学科卒業。大学在学中に芸能活動も開始。94年東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。今現在も都市工学を学んでいる。幅広い視点から国際会議・式典等の司会、講演活動を多数こなす。

川井

まずはじめに、パネリストの方々から話題提供をお願いします。

稲村

私の専門は文化人類学です。まず、ブータンに話題をしぼって話したいと思います。

ブータンの人たちは、地域の文化を大事にしています。日常生活とともに、お祭りのような非日常文化もとても大事で、そのような機会に家族やコミュニティ、世代間の交流等が培われていきます。

ブータンで最近話題になっているのはGNH＝国民総幸福量です。先代の国王が、「経済的な豊かさよりも心の豊かさ、つまり、GNPよりもGNHの方が大切だ」と発言し、大変大きな話題になりました。ブータンに特に学ぶべき点は、GNHを政策として実行するために、省庁の上にGNH委員会が設置されており、国の政策4本柱の中に環境と文化の保全がしっかり入っていることです。

ブータンから学んだことをもとに二つのことを提案したいと思います。

一つは、環境と文化をテーマとした小さな万博のようなものを継続的に開催することです。愛・地球博のときにこの地域に根付いた環境と文化についての意識、行動を持続していくため、地域の大事なもの、例えば、伝統的な先人の知恵などを、グローバルに、楽しく紹介し合うという場が、これから重要な意味を持ってくると思います。

もう一つは、複合型グリーンベルトです。森を自然から都市につなぎ、そこに環境と文化、楽しい学習の場、同時に災害避難路になるようなものを構想したい。そうした複合的な目的をもった緑地ならば、お金をかけてもやる意味があると思います。現在、愛知県環境部を中心に、生態系ネットワークというモデル事業が行われていますが、市民の側からこれを盛り上げ、さらにそれ以上のものにできないか。発想の転換と行動で未来は変えられます。愛知から世界のモデルを発信できるよう、やってみましょう。これが私の提案です。

原田

JICA中部なごや地球ひろばオフィシャルサポーターとして訪れた、東南アジアの小国ラオスの一村一品運動をご紹介したいと思います。ラオスの森を守るために私たちができる一つの方法として「フェアトレード」があることをお伝えしたいと思います。

JICAでは、農村の女性たちが農閑期にできるよう、特産品作りを支援しています。ある村では、ラタンという植物でかご製品を作っています。彼女たちの作品の中に、ピクニックバッグのように底面が大きなバッグがあり、これは今の日本ではあまり使われない形ですが、そのバッグからは、ラオスのゆったりとした暮らしぶりや豊かさが伝わり、とても素敵だなって思いました。私が持っていたカゴバッグは肩にかけるタイプになってて、これは日本でデザインしたフェアトレード商品です。縦型でコンパクトになっていて、バッグを肩にかけて走り回る、忙しい先進国の私たち向けのデザインです。「日本ではこんな形のバッグが多いんですよ」とお母さんにお話ししたら、熱心に見て、「今度来たとき作っておくね」と前向きに答えてくれました。

私は、JICAのオフィシャルサポーターであるとともに、フェアトレードのショップも営んでいます。途上国の現状を視察し日本の皆さんにお伝えするという任務とともに、途上国の品々を販売し日本のお客様へとつなげて、生産者さんに利益をもたらすフェアトレードという支援も大事なこととしています。

ラオスの人々は、貧しくても豊かな暮らしをしています。自然の恵みに感謝し、謙虚で、助け合う優しい暮らしがそこにはありました。先進国の私たちがこれから目指す暮らしがもうそこにはあるように感じました。そんな素敵なラオスにも現在は、近隣国が開発と称して土地を買い森を伐採し、プランテーション農園に開拓しようとしています。そうなると、今まで村民が享受してきた生物多様性の森からいただく植物も生物もなくなり、産品を作るための素材も調達できなくなり、生きていけなくなります。そんな開発なんて村民は望んでいません。

私は途上国からはいつも学ぶことばかりです。異国の文化や暮らしぶりから私たちが大事なことを心に感じて学ぶということは、自国の問題解決にもつながります。

笹谷

伊藤園は、「茶畑から茶殻まで」環境に関するさまざまな取り組みを行っています。原料の茶葉では、地元の農家などと協力して耕作放棄地などを茶畑に変え、契約栽培で茶葉を全部買い上げ、地域の活性化に貢献しています。この事業を九州5地区で展開中です。

また、茶殻のリサイクルも行っています。茶飲料の製造過程で発生する茶殻を乾燥しないままいろいろな材料に漉き込む新しい技術を開発しました。二酸化炭素の排出が減ると同時に抗菌性、消臭性、香りという3つの効用が得られます。

この技術を活かして、茶殻樹脂シートを貼った自動販売機を、世界遺産の醍醐寺に置いています。自然と調和する景観を守るなど、材料の特性をうまく利用し技術を獲得していくことが、企業の使命だと私は思います。また俳句など、農・食・伝統・文化も大切です。

伊藤園は、「自然が好きです。」をキャッチフレーズに活動し、3年前に海上の森と企業連携に関する覚書を締結し、社員による間伐作業や、親子工作教室を行っています。

伊藤園は、CSR（企業の社会的責任）について、国際基準であるISO26000ができましたので、それに即した体系的な活動を展開中です。しかし、企業だけではできないこともあります。地元の皆さん、メディア、NPO、自治体、大学でネットワークを組みたいですね。この中で広がりを目指していくべきだと思います。一過性でなく、みんなで情報交換し、発信して、大いに盛り上げていきましょう。一つだけ提言したいのは、海上の森で企業連携を締結している企業が、あいち海上の森センターに協力いただき、連絡会議をしたいなと思います。そうしますと企業の参画の仕方で一番良いやり方をみんなで学ぶということができます。

人と自然が共生する。そして、我々の目指すところはCommuni“tea”です。最後はやはりお茶ですよね。CSRの報告書を発刊したばかりですので、配布させていただいた報告書をぜひお読みいただきたいと思います。

吉田

私は、おむすび通貨という地域通貨を3年前から発行しています。これは、流域のお米で担保されたお金で、流域

内の事業者さんがお互いに使い合うお金です。地域で生まれるお米をお金として回し、有効期間の6ヶ月が経つとお金としては使えなくなり、最後は地域の中でお米に換えて食べて、みんながつながりながらやっていきましょうというものです。

何年か前、設楽ダム対策協議会代表の方と出会いました。この方は最終的にはダム建設に合意・調印されましたが、最初は町のほかの皆さんと同じように絶対反対でした。それは、設楽町の主力産業であった林業が、外材の輸入増加によってダメになり衰退していく、そういった中で人は出ていってしまうと思われていたからです。しかし社会全体としては経済発展が至上命題です。地元が誘致するのはお金が落ちるからで、そうしたものを誘致する村というのは、その時点で現金収入が絶たれているわけです。私はお話を何度か聞かせていただき、最終的に社会的事柄を決めていくのは、お金なのだと気づきました。

それからいろいろなことを自分なりに勉強し、分かったのが、文明が始まって以来、近代まで経済システムというのは、人間社会のためにあったということです。コミュニティ単位の自給経済があり、そのコミュニティにとって必要な物資をそのコミュニティの内部で行き渡らせる、あるいはそのコミュニティの外側と交易をして手に入れたりして、そのコミュニティを安定的に維持するために、経済システムというものがあったのです。

それが近代になり、儲けるために商品を買い、その儲けで商品を買って生きるためのシステムに変わりました。市場経済システムは、商品だけでなく、人間の労働力と土地が商品として自由に売買されない限りうまくいきません。お金によって人間関係が断ち切られなければならないのです。私は、10年ほど前に足助町の山村に移住し、自給的に暮らしつつ、名古屋で特許事務所を経営しています。私自身は都会のサラリーマン世帯で育ったのですが、足助で自ら米や野菜を作り、おじいちゃんやおばあちゃんと仲良くなって、「なんて豊かな暮らし、素晴らしい社会なんだ」と感動しました。

足助にわずかに残っているこれらを守り、もう一度つくり直していく。そういうことをしたくて、地域のお米で担保されたお金「おむすび通貨」を発行しています。日本円が全部おむすび通貨になる必要はないと思います。でも、自分たちが使うお金の1%くらいは地域通貨になったらどうか、地域で回るお金になって、地域で生産されたお米を私達が買い支える、そういう形を目指して、おむすび通貨をやっております。

川井

稲村先生からブータンの話がありました。現地で、国民総幸福量というものについてどのように感じられましたか。

稲村

民主化以降、それぞれの政党が選挙のキャンペーンで「いろいろなことをしてあげましょう。道路を、電気を整備しましょう」と謳ったので、ブータン政府は、各村に道路や電気をつなげるということを現在急ピッチで進めています。そして、その流れの中で、過疎化などいろいろな問題が起こり始めています。しかし、ブータンの人、特に官僚や政治家は非常に国際的な視点を持って、これから行くべき道を、はっきり意識しています。先進国を後から追いかけている一方で、自分たちの国の、特に環境と文化が壊れないよう、すごく意識しているという部分もあり、このことは私たちも学ばなければいけないと思います。

川井

原田さんのラオスの話から、フェアトレードはエコロジーとエコノミーを両立させる理想的な方法を示していると思いました。

原田

彼らには自分たちでなんでもできるという強さがあり、私たちは、彼らにふさわしい発展というものを間違えてはいけないと思います。一村一品という活動は、日本からの青年海外協力隊員たちが、村人たちと同じところに住み、同じ物を食べ、丁寧にやり取りして商品を作っています。これはとても尊いことで、この商品をデザインの力で流通に乗せるという、もう一つの方法が必要になってきます。今までは技術サポートが多かったかもしれませんが、これからは売るためのデザイン・サポートとして小さい動きをたくさんつくっていく、さまざまな方面からの思いやりのある国際協力によって世界は変わると思います。

川井

次は笹谷さんに、海上の森での活動について、もう少しお話いただけますか。

笹谷

社員が先日間伐を体験し、いい汗をかいて、勉強にもなりました。海上の森大学で学ぶ社員も現れ、今後新たな展開が生まれるかもしれません。関係者との連携や、いろいろなご指導の中で、ベストモードを探していきたいと思っています。

川井

あいち海上の森センター名誉センター長のマリさんからもコメントをお願いします。

マリ

最近、企業もCSRの場として海上の森を活用してくださっています。私たちの今の生活は森から離れてしまい、子供のころに学んだことも、再び教わらないと分からない状況です。海上の森で活動して、たくさんのことを次の世代に伝えることが、社会に貢献することになると思います。

川井

地域・コミュニティというキーワードとともに、人と自然、人と人、地域と地域のつながりがどのようにできていくかが大変重要だと思いました。

おむすび通貨は、使える場所が大きくなると、地域ではなくなってしまいますが、これについてどのようにお考えですか?

吉田

川のそばで暮らし、同じ海を共有している人たちが、自分たちの経済システムを自治していくという意味で、伊勢・三河湾流域、愛知・三重・岐阜の3県の中で回るお金として考えています。

川井

原田さんは既存の経済システムの中でお金を回すシステムを、吉田さんは逆に経済システムそのものを地域の中に新たに構築していこうとしていて、全く違うようですが、狙いは共通しているのではないかと感じました。

稲村先生に、グリーンベルト構想についてもう少しお話いただきたいと思います。

稲村

今この時代にグリーンベルトを展開させていくことは非常に大事であり、愛知県が進める生態系ネットワークに、文化の要素を加えたり、避難路として使えるようにするなど、いろいろな普遍的な要素を盛り込み、人々が関心を持つような場所として構想していく。そうしたことによって、我々の社会を切り替えていくということが、一つの事業としてできれば、愛知から発信できる非常に優れたポリシーになるのではないかと思います。

川井

今、身近に我々がアクションできるものを、つながりとか連携に関連付けてお話いただきたいと思います。

笹谷

3.11のあと、価値観が大きく変化しました。安心・安全、絆、エコ。この3つを押さえておくことが重要で、ライフスタイル・皆さんの意識が変わったと思います。当然企業の行動も変わりますが、企業の場合は、CSRについて、ISO 26000という国際基準ができましたので、社員全員に意識を持ってもらい、それを組織としてみんなで進めていきます。また、社員には企業を離れても、社会のトレンドに同調して意識的に動いてもらいたいと思います。今日はそういう意味で勉強になり、とても刺激を受けています。

原田

今すぐできる国際協力・地域貢献であるフェアトレードをお勧めします。笹谷さんのように正しい方法で、最後まで商品の面倒を見ている企業の商品を買う。そういった正しい方法で製造された商品を選んで買うというエシカル消費者＝倫理的なモラルを持った消費者に皆さんがなられることで、世界は大きく変わると思います。

企業を動かすことができるのは、一般市民の皆さんの消費行動だと思います。そして売る側は、販売する商品は正しい生産背景であることに責任を持ち、さらには消費者に「ほしい」と思ってもらえるような魅力的な商品にしてゆく仕掛けをつくるべきです。生産者さんたちが持続可能な収入を得ることができ、伝統を継承し、地域の自然を守り、自国の文化や暮らしに誇りを持ち、次世代に継承できれば、おのずと未来は明るいのではないかと思います。

私はローカルとローカル、地に足の着いたそれぞれ違うものがつながることがグローバルだと思っています。まさにフェアトレードは、途上国のローカルと先進国のローカルが思いやりでつながることです。世界で起きている問題は、遠いところで起こっていても「他人ごと」でなく、「自分ごと」。すべてつながっているのだなと思います。

川井

地域社会、文化、地域をどのようにつないでつくっていくのか、今回、こういった課題が大きくクローズアップされたかと思います。本日はありがとうございました。

エシカルファッションショー

協力：エシカル・ペネロープ株式会社

パネルディスカッションのパネリスト、原田さとみさんが取り組まれている「エシカル・ファッション」の紹介を兼ね、パネルディスカッションの前にファッションショーが行われました。モデルには愛知淑徳大学と金城学院大学の学生が協力してくれました。

ネパール音楽の演奏

ラリグランス カルチャーグループ

タパ・マン・バハドゥールさんを中心に活動している「ラリグランス カルチャーグループ」の皆さんに、ネパールの民族楽器による演奏と、子供たちによる民族舞踊を披露していただきました。

フォーラム宣言

フォーラムのまとめとして、パネルディスカッションの出演者により「フォーラム宣言（案）」のとりまとめが行われ、コーディネーターの川井秀一氏から、参加者に提案されました。この宣言は、参加者の拍手による賛同を得て採択されました。

第6回　人と自然の共生国際フォーラム
フォーラム宣言

私たちは、これまで開催したフォーラムで、里山が人と自然をつなぎ、地域づくりの場として重要であること、また自然を持続的に利用する生き方の大切さを学んできた。

昨年３月の東日本大震災からの復興が遅々として進まない現状を鑑みると、議論を積み重ねていくことが重要である一方、先人の知恵に学び、新たな社会の構築に向けて、いま私たちにできることから行動を起こしていくことの大切さを再確認した。

このフォーラムでは持続可能な社会を目指して、どのように行動すべきかを議論した結果、以下の宣言を行う。

① グローバル化した市場経済依存の社会より、地域の文化や持続性優先の経済を基盤にする「ふるさと」へと移行することの重要性を認識する。

② 市民活動を活性化し持続させるために、愛・地球博、生物多様性条約に関わるCOP10での実践活動を活かし、グローバルな視点で今後も様々な取り組みを行う。

③ 多様な自然、いきもの、人とのつながりを尊重し、フェアトレードの根底にある調和と共生の価値観や暮らし方を考え、行動する。

④ 市民、企業、及びNPOは手を携え協働して、「森づくり」や農村から都市にいたるそれぞれのコミュニティを結ぶ「地域連帯」、また「循環型社会に向けた取り組み」について対話と実践を進め、里山の維持保全と共に相互の活性化に努める。

今後これらを広く発信し、社会や暮らしを見直す決意を育みながら、自ら具体的に行動していくことを約束する。

平成24年10月13日　人と自然の共生国際フォーラム参加者一同

人と自然の共生国際フォーラム実行委員会

あいち海上の森センター　国際フォーラム事務局

〒489-0857 愛知県瀬戸市吉野町304-1

電話 0561-86-0606　FAX 0561-85-1841　Eメール kaisho@pref.aichi.lg.jp

http://www.mu-academy.jp/forum/index.aspx　人と自然の共生国際フォーラム　検索